Japanese Red Cross Hiroshima Coll. Nurs. 12　101 ～ 103. 2012

【研修報告】

平成23年度国際看護学演習（米国）に参加して

―看護教育の在り方への所感―

三　味　祥　子[*1]，笹　本　美　佐[*2]，村　田　由　香[*3]

Ⅰ．はじめに

平成23年８月16日から28日の米国国際看護学演習に参加し，アメリカにおける看護教育の現状について，デンバー州コロラド大学看護学部での５日間の講義と施設見学により学びを得たので以下に報告する。

Ⅱ．国際看護学演習概要

１．演習日程：平成23年８月16日（火）～８月28日（日）

２．演習目的：コロラド大学看護学部の講義，関連保健医療施設の見学，異文化研修を通して，看護の本質を探究する。また，米国赤十字社の活動や支援システムを学び，国際的視野から赤十字の役割と機能の理解を深める。

４．担当教員・参加者：教員５名と学部４年生16名。

５．授業スケジュール（表１）

Ⅲ．国際看護学研修（米国）参加により得られたこと

１．CON Clinical Education Center見学での学び

（担当：三味祥子）

夏季休業中であったため，上記センターの担当教員から説明が行われ，施設見学を行った。基礎看護技術の演習は，ＡＤＬに関する演習が主で，学生が２人１組で技術演習を行い，その演習内容は演習ベットに設置されているカメラで内容が撮影され，演習後すぐに映像を参考にフィードバックを行う形式で演習を行なっていると説明があった。そして，演習直後に映像を踏まえて学生自身の行った看護技術を担当教員と一緒に振り返り，自己の看護技術とアセスメントを見直す機会を得ることで，学生が演習から自己の課題が何であるかを学べる方法がとられていた。また，週に１回４時間，教員１名が実習室に在室し，学生が自己学習を有意義に行えるような

表１　国際演習コロラド大学講義スケジュール

日程	午前	午後
８月17日（水）	米国赤十字　マイルハイ支局	
８月18日（木）	コロラド大学デンバー校	Welcome Lunch with Faculty and Students
	コロラド大学看護学部の概要と紹介（Dr. Moritz）	CON Clinical Education Center（Skills and Simulation Labs）& SOM Center（Advancing Professional Excellence Simulation and Home CareLabs）見学
	保健医療システム（Dr. Igoe）	
	小児看護学（Dr. Gilbert）	
８月19日（金）	老年看護学／Caring　of Elderly（Dr. Nelson）	Health Sciences Library & Rare Books Section 見学
	精神看護学／Psych-Mental Health Nursing（Dr. Weber）	
８月22日（月）	米国での高度専門教育について（Dr. Campbell）	The Children's Hospital（救急部・外来部・各専門病棟）見学および小児病院概要・小児病院看護教育の説明
	ケアリングサイエンスについて（Dr. Watosn）	
８月23日（火）	成人看護学／Trauma Triage Experience（Dr. Robinson）	University of Colorado Hospital見学およびMagnet Recognition Programsについての紹介
	米国看護教育・大学院教育について（Dr. Magilvy）	
８月24日（水）	緩和ケア／Palliative and End-of-Life Care（Dr. Nelson-Marten＆Ms. Asakura）	Studying Abroad（Ms. Asakura）
		Farewell Reception
	公衆衛生地域看護学／Public and Community Health Nursing（Dr. Sakraida）	

[*1] 基礎看護学，[*2] 精神看護学，[*3] 広域看護学

体制も整えられていた。さらに，演習終了後にシミュレーター学習を行うことで，臨床実習への移行をスムーズにし，充実した臨床実習ができるようにカリキュラムが組み立てられていた。

本学の基礎看護技術演習でも米国の看護教育と似通った教育が行えていると感じられた。しかし，①演習直後に映像をもとにフィードバックの機会が整えられていること，②オフィスアワーが演習後時間を空けず，適宜設けられているということに相違があると感じられた。①の学習体制を整えることは，学生が自分の看護技術の状況を把握することで課題をもつことができ，また疑問や不安をその場で解消できることでアセスメント能力向上が可能になると考えられえる。また，②を類似した演習項目後に適宜行なうことにより，技術の再確認を学生と教員が共に行え，学生の技術の向上と自信へとつながる。さらに，教員も技術教育のあり方について，どのような指導が必要かの検討ができると考えられる。

本学の基礎看護学演習において，今後も学生の技術能力やアセスメント能力の向上を図っていくために演習の教育体制を検討し，整えていく必要性があるといえる。

写真１　シミュレーションセンター

２．マグネットホスピタル認定コロラド大学病院見学（担当：村田由香）

コロラド大学は６つのマグネットホスピタルで看護学実習を実施している。コロラド大学病院もその一病院であり，マグネットホスピタルとして2002年，2005年，2010年と３回のANCC認定を受けている。

筆者らは８月23日の午後から，コロラド大学病院のMagnet Recognition Programsについての説明を伺い，５名の新人およびスタッフナースとの質疑応答の後，大学病院の見学をした。

Magnet Recognition ProgramsのMagnet構成要素には，①変革的なリーダーシップ②構造的なエンパワメント③模範的な看護実践④新しい知見・改革・改善⑤実際の質に関するアウトカムがある。米国で最も教育水準が高いスタッフが集まっているといわれるというコロラド大学病院は，1500名のＲＮのうち，80％以上が学士号または修士号を持ち，高度実践看護師（以下ＡＮＰとする）が40％占めており，Magnet構成要素を常に向上できるよう教育研修プログラム等が整えられ，新人看護師の入職競争率は10倍ということであった。彼らは，入職当初より各自の専門コースを決定しており，新人研修コースを修得しながら，自発的に月１回は情報収集のために集まっているということであった。入職して１年満たない新人看護師が「働き甲斐がある」という誇らしげな姿がとても印象的であった。

病院内は広い空間とディスプレイが心地よさを感じさせていた。また，長い廊下の数箇所にＰＣカウンターと椅子が設置してあり，患者にとっても，働く看護師にとっても，快適な空間を維持していた。スタッフの人数も充足しており，病室環境も効率的に治療・看護ができるよう整えられていた。常に看護ケアと技術革新の卓越性を向上させようとする組織の勢いとスタッフ一人ひとりの絶え間ない努力を肌で感じることができた。

写真２　新人看護師たちと

３．看護教育における学び（担当：笹本美佐）

先ず，日本の看護教育を展望する上で興味深かったＡＮＰ教育について報告する。アメリカでのＡＮＰ教育は，1954年のCNS（Clinical Nurse Specialist）に始まる。その後，1960年代に医師不足と医療サービスの格差が社会問題となり，診断と薬剤の処方が認可されたNP（Nurse Practitioner＝以下NP）が誕生した。当初、NPは医師や薬剤師との競合や看護職内での役割葛藤があった。しかし，それらを乗り越え医療の質および医療経済効果における成果を示し，2010年には135,500名を輩出している。さらに，2004年には博士号をもつNP（Doctor of Nurse Practitioner：DNP）の育成が開始され，2015年を目途に，American Association of Colleges of NursingはANP教育を全て博士課程に移行する方針

写真３　トリアージ用ぬいぐるみ

を固めている。このような動向の中，日本におけるANPは、国民に安心で質の高い保健医療・看護の提供を行うためにどのような方向付けがなされるのか検討結果が待ち遠しい。

次に，授業から得た教育的学びを報告する。１点目は，教授法についてである。老年看護学における，黄色のセロハンを貼った眼鏡の装着，関節に相当する部分にテープを巻いたプラスティック手袋を装着しての錠剤の仕分等の老人体験は，頭で分かるだけでなく納得することができ、学習意欲の向上につながっていた。また，成人看護学でのトリアージ体験では，損傷を受けた様々なぬいぐるみを活用して行っていた。トリアージというシビアな状況をリアル過ぎずに能動的に体験学習をするための工夫であると考えた。いずれも，学生に学習への効果的な動機付けが行われていた。２点目は，問答法についてである。学生に考えさせるような発問，学生が自由に自分の考えが言える肯定的なフィードバック，さらに考えを深めるように導く発問が行われていた。これらは，学生の思考を刺激し主体的な学習を可能に

写真４　老人体験

すると考える。

今後，研修での学びを生かし，学生への効果的な動機づけによって学習への主体性の促進に取り組んでいきたい。

Ⅳ．おわりに

海外研修に参加したことで筆者らは，米国における先駆的な看護教育に触れることにより刺激を受け，本学の看護教育を見つめ直す機会となった。今後，本研修で得られたことをもとに本学の看護教育の発展に尽力していきたい。

Ⅴ．謝　辞

本演習への参加にあたり，日本赤十字広島看護大学海外出張旅費助成を受け参加させて頂きました。貴重な機会を与えて下さいました先生方と本学に深く感謝申し上げます。